

令和七年六月吉日初版作成

最高の徳を積む

高嶋 善三郎

目 次

● 真の功德を得るには・・・・・・・・・・・・・・・・	3
● 老子の説く玄德・・・・・・・・・・・・・・・・	4
● 玄德の心を現わす方法・・・・・・・・・・・・・・・・	5
● 最高の徳は、神聖を輝かし、自他を生かす・・・・・・・・	6

お 願 い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブサイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。

次の連絡先にお問い合わせ致します。

（スマホ） 090-3334-6619

（メールアドレス） zensan@peach.ocn.ne.jp

真の功德を得るには

徳を積むとか功德を得るとか、いわれていますが、その意味について五井先生のみ教えの中ではどのように説明されているかを教えてください。

徳という言葉は、『広辞苑』によると、①道をさとした立派な行為。

善い行いをする性格。身についた品性。②人を感化する人格の力。めぐみ。神仏の加護。③「得」と通用) 利益。もつけ。富。

また、功德という言葉は①よい果報をもたらすものとなる善行。②善行の結果として与えられる神仏のめぐみ。③利益、と記述されています。

それに対して、五井先生のお言葉『宗教問答』問76漢の武帝が達磨大師を宮中に招待して、私は寺をいくつも建てた。僧侶にこれこれの布施をした。写経もした。だからこれに対して仏もきつと充分な功德を報いてくださるだろう。という、達磨大師に「無功德」といわれたそうです、この無功德ということについて教えてください。()によると、

真の功德は、本心開発をしていく中で得られるもので、空の境地を通じ

て発せられる、「させて頂く、やらせて頂く」という謙虚な布施行為を通してのみ得られるものであると、解説されています。

その言及されているお言葉を見てみましょう。

「真実の功德というものは、本心開発の道を突き進むことによつてのみ得られるものであり、その道は一度空の境地を通つてこないと得られない道なのである。

ところが、この世の肉体人間は、とすると自分のやった善行為を自分で計ってみたり、人に計ってみてもらいたいような気分を持っているものなのである。無理もないように思えるが、そうした想念をしても、決してその善事が自己の本心開発の助けにはならない。

これを露骨に出した、いわゆる恩着せがましい行為などは、何もしいよりまだ自他を痛め損する場合があるものである。空の境地を通じてこなければ、と先に申したが、恩着せがましい人々の多いこの世の中で、そんな境地に一体誰になれるのかという疑問が出てくる。空というわずかに聞くえるが、させて頂く、やらせて頂く、という謙虚な布施行為はすでに、空即是色の空から発した想いであって、そのまま光であり、そのまま真実の功德への道でもある。

何事につけても思い上がりの気持ちをもつことは、その人を傷つけ、

低めるだけであって、決して功德の道ではない。

善にも悪にも、把われてはいけない。把われの想いは、すべて業想念である。いかなることにも把われの想いがでてきたら、その時なるべく速やかに、世界平和の祈りの中にその把われの想念を投入してしまうとよい。そうすると、空の境地も考えずに、いつの間にか、常に空から発する愛と真の美しい行為を生活に行じていられるようになって来る。生命が人間としての自己に生きている、ということが、すでに大いなる功德なのであるから、その功德を益々生かしてゆくように、謙虚な気持ちで、常に業想念は消えてゆく姿の教えを信じて、世界平和の祈りの中から、自分の生活をしていくことが、この世における最大の善なる真なる生き方である。」

老子の説く玄德

「ここで、老子の説く徳について『老子講義』第二十七講（道これを生じ、徳これを畜い……）から整理してみよう。

老子は、道を、万物を生ぜしめる根源の力という意味で使っており、万物を畜（やしな）う力という意味で徳という言葉を使っています。

「道德の力をして、万物が生育し、過ちなく各自各種の生活生存を為し得てゆくのであることを説いているが、その道德を基盤にして、物質的な要素がすべてを形づくり、勢い、つまり各種のエネルギーの働きによって、万物がそれぞれの存在活動をなしえてゆくといっている。

道や徳は、万物を生成発育させて下さっているのだから、道を尊び徳を貴ばざるものはいない。誰も彼も、何事もすべて、道や徳の力に尊貴の念をもっている。どうして、道がそうに貴いのかというと、道でも徳でも、誰に命ぜられたからといって、その行為をしているのではなく、命ずる何者もないのに、自らが自然に、万物を成長させていることが、その尊貴に値するところなのである、というのである。命ぜられたからする。なんの理由があるからする、というのでは、その理由があることによって、その尊貴さはマイナスされてしまう。ということがその裏の言葉にあるわけである。」

「親子の間でも、師弟の間でも、友人間でも、あらゆる対人関係において、こういう玄德の心が現われていたら、どんなにこの世の中は美しく住みやすいものになるであろう。」

「報いを求めぬ愛の心は尊いものである。だが報いを求めぬ、ということだけでも、今の人々にはなかなかできがたいことなのである。

それは個人の間でも、国家間においても、現今ではほとんど、こうした愛は行じられていない。個人の間ではまだしも、国際間においては、実に報いを求めぬ愛行為がかけている。

自己の爲したことについて、なんらかの報いを期待したら、それが金銭的なことでなく、相手の喜びをさえ期待したら、その人の愛行為は、無為でなくなるのである。無為から生じた行為でない場合には、必ずといっていいほど、その人は期待はずれの結果を、いつかは受けてしまう。その反対に自分がいつしたのかすっかり忘れ果てていたような愛行為が、相手にとって終生の喜びとして、心を温めている、というようなことが、よくあるものである。このところが、老子の無為の思想の根本のところである。」

玄徳の心を現わす方法

そして五井先生が次のように 私たちの生活の中で、玄徳を現わす上で、留意すべき点について言及されています。

「私はそうした道に入るのには、やはり、祈りによる心の浄化より他に方法がないと思っている・・・」

自然の美や、無心なものにひかれている時の輝くような瞬間、愛の心に触れた時の喜び、それらの心の状態は、頭脳を駆け巡る想念波動からくるのではなく、そうした想念がどこかに鎮まりかえった時に、本源界の生命の光が、そのまま伝わってきたことによる輝きである喜びである。玄徳の心というものは、そうした輝きや喜びを、瞬間的に味あうようなそういう心の状態でもなく、そうした本源世界そのままだが、常の状態としてあるので、特別に輝きを感じ、喜びを感じる、という境地をはるかに超えているわけである。

ところが、そんな心の状態には、普通人ではとてもなりえない。そこで私（五井先生）は祈りによって知らぬ間に玄徳の心に近づけるような方法をお伝えしているわけである・・・

世界人類の平和をひたすら祈り、自分たちの天命が完うせられることを祈り続けるような、世界平和の祈りの心の状態というものは、今すぐ世界人類が平和になるものではなく、自分たちの天命が完うされるものでもないから、祈りの効果を焦り求めるような状態にはならない。ただ、神への感謝を根底にして、自己の業想念を、救世の大明光の中に投入して、心臓や肺臓が、自分がなんの思いわずらいをせずとも、自然にその働きをしていくるように、自分の想念行為も、自然と、神の

み心そのままの想念行為になってくるように、自然と玄德の心になってくるように、というのが、この世界平和の祈りの心の状態なのである。」

最高の徳は、神聖を輝かし、自他を生かす

徳は、一般的には、愛の行為を意味しますが、老子のいわれる玄德というのは、五井先生の言われる神聖と同じ働きを意味していることに気づきます。それは、前項で言及した、万物が生育し、過ちなく各自各種を生活生存させてくださっているという玄德の働きと、大自然の根源の働きをその智慧能力で、大調和達成のために生かしてくださっている神聖の働きは全く同じであると考えられるからです。

このことが、真実の功德というものは、本心開発の道を突き進むことによってのみ得られるものであると五井先生が言われるゆえんです。

また本心開発に繋がる徳は、徳を積もうと思って徳をするのでもなく、徳を積んだと自分で思っているわけない、自然と行為に現わした物事柄が、徳になっている、善行為である。それに対していつも徳を積みだしたとか、残したいとかいう、徳という行為に自分の心が離れずについて、

徳の行為をしているといった徳は、徳の行為をしながらも、それが純粹の意味でいう徳ということになっておらず、本心開発に繋がっていない。

『老子講義』第十七講上徳と下徳

本心開発に繋がる徳のためには、無為から生じた愛の行為が不可欠である。またそのような境地になれない場合は、させて頂く、やらせて頂く、という謙虚な布施行為であることが大切だ。その行為は、空即是色の空から発した想い、即ちいかなる報いも期待しない想いだからだと説明されています。

これらの行為によって、どちらにしても、想念を、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たされている神聖の中に統一してしまうことが可能になるからです。

最高の徳は、すべての想念を神聖に統一したとき、はじめて無為にして積むことができる。そして神聖の働きにより、積まれる徳は、さらにあらたなる徳を呼び、雪だるま式に大きくなっていき、その人は愛の光に包まれ、自分だけでなく、多くの人達に喜びを与え、生かすことができることになると言えます。

私たち神人は、このことを肝に銘じて、神聖を復活させ、日々の生活を有意義に過ごしていきたいものです。